

[新収品紹介 2]

孔子観欵器図

雪村周継筆

室町時代 紙本著色

39.6cm×93.0cm

昭和56年秋の当館の特別展「雪村一戦国乱世を生きの大画人」に、本図が出陳されていたことを記憶されている方もおられると思います。雪村画のなかでもひとときわ色彩が明澄で近代日本画に通じる感覚をもったものとして印象にのこっているのではないのでしょうか。この画は、組田コレクションの一つとして有名な作品ですが、前の「一休宗純像」と同様に、これも縁によって当館のコレクションになりました。文華館の雪村画コレクションのすばらしさはひろく知られていますが、この雪村晩年の代表作「孔子観欵器図」が加わることで、いっそう充実することになりました。

さて、「腹八分目」という、肥満を悩んでいるひとは、ちょっと気になることばですが、この格言のルーツをたどりますと、中国の儒教の祖である孔子の逸話からきています。それは『荀子』、『孔子家語』に典拠があります。

孔子が魯国の桓公の廟にきますと、その前に傾いてひっくりかえりやすい金属の器(欵器)が置かれてあり、そのわけを弟子の子路に聞きにやらせました。廟を守る者が言うに、水が一杯に満ちるとひっくりかえり、まったく水を入れ

なければ傾き、ただ水を八分目に入れておくときは正しくして傾かない。この欵器をもって人の盈満(えいまん)、すなわち物事が十分に満ち足りることを戒めているという(孔子は子路に聞きにやらせるまでもなく、欵器のその意味は知っていたに違いない)。

この図では、画面左には欵器をためしているところ、右には孔子とその供に子路が報告しているところが異時同図法的手法でもって描かれています。

欵器図の画題としての歴史は古く、トルファン・アスターナ墳墓の壁画(唐時代)にも描かれており、日本では室町時代以後、三教一致思想(仏教、儒教、道教の教えを究極には同じとする思想)とともに移入されたものと思われます。雪村以外では周楊(16世紀)の「欵器図」が知られ、また探幽縮図に欵器図が記録されています。雪村は中国からもたらされた絵手本によってそれを描いたのでしょう。

本図は、無地の背景に人物、器物、水など丁寧に描かれ、通常の雪村画風からすれば異質なほど説明的であります。落款印章は晩年七十歳代のもので、「雪村自画像」(当館蔵)と同じころの制作と考えられます。(林進)

孔子観欵器図 雪村周継筆



季刊 美のたより No.80

昭和62年 8月 20日

発行 大和文華館